『鎌倉三代記』の高綱

――人形覺書其十二――

大西重孝
齋藤清二郎

かしら、小道具解說並繪

『鎌倉三代記』八ツ目切、「三浦別れの段」は文樂でも珍らしい出し物である。二月狂言として前を「三浦之助別れの段」として呂大夫仙糸と、伊達大夫、勝平との毎日替り後を『佐々木高綱物語の段』として大隅大夫、清二郎で勤めた。人形は出遣ひ。高綱は桀三、左手は玉市、足は門次である。登場人形のかしら其他は別項を參照されたい。

「かくと白齒を染め兼ねる、思ひに迷ふ時も時」で、時姫が袋入りの太刀を抱いて、正面納戸の暖簾から出て、上手斜向きに坐つて思案にくれる。すぐ「姫に見入つた藤三郎」で、同じく暖簾を分けて陣笠を頂いた雜兵姿の藤三郎が現はれ、先づ姫を見やつてから、下手、上手を窺つて下手へ出、姫の方に向いた立ち身で「尻付き小馬の細目して」で、右手を卑しげに口に翳し、姫から目を離さず、首を細かくまはし乍ら近づいて、最後の「ほーそーめエしイて」で、右膝を上げてからトンとふんわりと坐り「コレお姫樣、なんと其守刀、慥かな證據でござりませうがな」と、左手で姫の抱いた太刀を指差し「それを證しに北條樣から」と、右手で正面を指差し「お迎ひに來た……藤三郎」と、自分を指差して姫の顏を見「サアござりませ」と、兩手で姫の右手を取る。姫は振り離すので、驚いて兩手を引込め、姫が「三浦之助義村が妻の時姫、假令父上でも敵味方、敵の家へなんの歸らう、迎ひの人もあるべきに、名も知らぬ新參者」と、怒るのでギックリとなり「返事に及ばぬ歸れ〳〵」と、云ふのを、兩手を膝にお

いて聞いてゐたが「これはしたり、そりや悪い思ひ付きぢやぞへ」と、左手を上げて手首をペコンと下げて制し「鎌倉方の御評定には」と、正面となり向ふを見て「坂本の城は追付け落ちる」と、右手で向ふを二度指差し「お前の大切に思はしやれます」と、姫を顧みて「……三浦殿は、今日、明日の中首がころり」と、首を前に突出して、右手でその首筋を打つ眞似をして「……其手筈ちやんとしてある」と、兩手をポンと打合す。「なんぼ可愛がらしやつても、首のない男に心中立てるは、跡の月の富札を買ふ樣なものぢやぞへ」と、右手に扇をとつて前に出して姫を見る。「そんな危いものより男に持つて、ェヘン」と、咳拂ひして「……何不足のない」扇をサツと開き（白地に小きな日の丸を描く）右脇に構へ「……この藤三郎」と、正面となる。謠がゝりの「時姫を取かへして戻つたらば、其褒美には」と、いかめしく起上り、坐り、

役名	かしら	塗	髪	備考
安達藤三郎	ねむりの検非違使	白	油付茶筌（ぼうちや付）	「與兵衛」かしらとも云ふ
佐々木高綱	検非違使	白	採揚大捌き	
三浦之助義村	アオチとネムリの源太	白	唐毛前髪付捌き	
時姫	むすめ	白	油付十能花櫛	
三浦之助母	婆々	薄卵子	白のすッぽり	
女房おくるふけおやま		白	油付島田	
阿波の局		白	油付片はづし	
讃岐の局	同	白	油付片はづし	
富田六郎	團七	卵子	採揚後ばら	「金時」かしらを用ふる事あり、總じて「丸目」もののかしらにて良し

再び起上り「汝が女房に遣はす間」と、向ふへ一つ廻つて正面に戻り「心のまゝに連れ歸れ」と、右足を引いて、右の扇を開いたまゝ右へ流し一寸極つて「……との御上意」と、扇を前に構へ、右ひざを上げてから姫の方に向ひトンと坐る。「父御にきつと約束して來たからは」と、つぼめた扇で正面を指差し「殿御と云ふは」と、半ば開いた扇を前に出して一寸姫の方へ首をひねり「コレ此の藤三」と、扇の手をひざに置いて姫を返り見る。「お前への心中に」と、立上つて、開いた扇を前後に持つた右と左の素手とを交互にトン〳〵〳〵と姫を指差し乍ら絃について道化た振りをして「顏に入墨して來たはいな」と、今度は左手で左頰の入墨を指差してトン〳〵〳〵と、近いて坐り「イヤ又美しいものであるが」と半ば開いた扇を逆に持つて右から左から姫を無躾に覗き見て、「いやでも應でもかたげて退く」と、兩手で姫の右袖を捕へると、姫は顏をそむけて、袖を引合ふことがあつて、「サア〳〵お出」となる。

時姫は「寄るな推參者、主人に對して慮外者、時姫が手討にするぞ」と、太刀に手をかけるので「ヒエー」と、兩手を引き「扨はお前は首のない男が」と、首を突出して右の扇子で首筋を打ち「……好きぢやな、マどう慾な御心底、御免々々」と、前に差出した扇と首とを一緒に振り、姫が太刀を拔いて藤三郎の足許を拂ふので、飛上り「天窓抱へて」で、屋體を出て振り返り開いた扇の骨の間から姫を覗いて、輕く扇を姫の前に投げ棄てゝ、下手（本手の）へ輕く手を振つて逃げ去る。

時姫が父時政の仕打を恨んで自害を企てる。三浦之助がそれを止めて、「今死ぬる命をながらへて、三浦が最後を見屆けた上、夫の敵討つ氣はないか」と迫る。「ム、敵を討てとはそりや誰を」と、時姫「おゝ云ふ迄もなし鎌倉の大將北條時政」と、三浦之助。時姫は時政を討たうと答へる。おくるが注進しようと駈出すのを三浦之助が弓（小道具圖解參照）で押へると、富田六郎が、走り出て下手寄りの井筒にかゝる、「下より突出す鎗先」で、井筒の中から突出された片鎌鎗（小道具圖解參照）に突かれて虛空を摑んで井筒の側に死體を横たへる。「三浦之助聲をかけ」で、三浦之助は下手斜に居住ひを正し、左に弓をもたせかけて「かねて申合せし計略」と、閉じた扇子を上に翳し「今日只今鑿ふたり」と、太刀の束頭を扇で打ち「佐々木でギックリとなり「四郎左衛門高綱殿いーざ」と、右足を踏出してツケを打たせて極り「……此方へ」と庭先に降り立ちトン〳〵〳〵と後へよろけて框に腰を落し「と請ずれば」一杯に扇を開いて頭上に翳して大きく極る。「井戸よりぬつと藤三郎」で、井筒の側に横たへられた以前の鎗に兩手をかけて「始にかはる優美の眼中」で、以前の藤

三郎、上着を引抜いて、金糸で一文錢をおいた朱の下着に紫の褲をかけた姿で現はれ、後へトンと飛び下り、左手に鎗をとり「千萬人に勝れたる」富田六郎の死體に目をつけて、トン〳〵〳〵その上手へ出て、ツケを入れて死體を井筒の内へ蹴込むと「……威風備はり」一杯にトンと左足を踏出し、ひざを上げて左の鎗を上にかざし、右手を前に突出して首を下手へひねつて眉を一杯に上げてツケ入りの見得。この時、鎗の柄が一尺一寸伸る仕掛けになつてゐることは圖解通りである「……見えにける」で下手から屋體へ入つて上手寄りで正面となると、待合せとなつてゐた床が「……眞中にどつかと坐し」となり、右足を踏出して左手の槍を翳げてトン〳〵と極る。坐つて鎗を左に立てかけて持ち右手をひざに突張つて下手の時姫の方へ首をひねり「ホ、時姫の不審尤も」と、鎗を下におく「彼に居るおくるが」と、上手庭先のおくるに目を移し「……夫藤三郎と云ひしは、面體我に見紛ふばかり」と右手で自分の顏を指差し「似たるを幸ひ價をくれて命を買取り」と右手を右から大きく前に持つて來て肱を折つて掌を上に向け「去年石山の陣にて」左手を突出し「北條家を欺きし、佐々木が賢首こそ」と反り身「彼の藤三郎」と首を上手から正面へまはして來ると共に、上半身をのり出して姫を見る。「僅かの恩に不便の最後」とウレヒで首を垂れ「女が心思ひやる」と、おくるに目を注いで眉を一杯に上げ十分のウレヒを見せて再び首を垂れる。「龍は時を得て」と、身體を起し「天……」と、上手の空を見上げ「地に」と、下手下を見下し「……蟠る」と、上半身を前に突出し「時を失へば守宮みみずと」と、右手を前に出して開いてから握つて首を上手からまはして來て「……身を潜む」と、右手を左脇に寄せて身體をのり出し「我君の爲めに」下手斜になつて右手を頂いて辭儀をして「肺肝を碎くと雖も」と、右手を胸に當て「賴家公の武運拙さ」と、上半身を前にのり出し首を垂れ「なす事、する事一つもならず」と兩手を握つて肱を張つて前に突出して眉を一杯に上げて無念の心を表はし「此度の合戰は坂本城」と、身體を起して正面向ふを見やり「……滅亡の時」となり「天より亡す」と身體を反らせて上を見上げ「主人の運命チエ……」と、トンと左足を踏出して右にかゝり「無念の鬱憤止む事なく」と、兩手を握つて前に突出し、腰を浮かして下手向ふを睨んで身體を震はす。「最早計略の術つき果てたる詮の詰り、百計の中の唯一計」と、右手を出して指を折り「おくるに篤と申含め」と、右肩を引いておくるを見返り「死したる藤三が」と、正面向ふを見やり「名をかつて」右手を前に伸ばして眺め、左手を伸ばして眺め、その目を左から右へ移し「產の土民に拵へすまし、指にも足らぬ端武者共に」と胸を押へ「易々と」と右手の肱を折つて掌を齒でしごき「生捕られ」となり「時政の前に引出されしは」と、顏

の前に揃へて上げた兩手を大きく左右に展げて「地獄の上の一足飛び」と、上に飛び上り、左足を踏出し右にかゝり兩手を左右に開いてツケを入れて極り、更にノリの位について、左手の肱を折つて前に出し右手を突上げて大きく見得を切り「……未だ天道」と、正面となつて右手を開いて突出して上を見上げ「……捨て給はざる驗にや、さしも明察の北條殿」と、正面となり「四夫下郎に相違あらじ」と、身體を右にひねつて左手を突出し「コレ此の面に入墨を」と、下手の方、三浦之助と時姫との方に向いて眞横の形となり、絃に合せて首を左右に振り、同時に頬を差した左肱を動かし乍らトン〳〵〳〵と膝で當る「刺されし時の其嬉しさ、ムハハ……」と笑ひ乍ら正面となり、トンと右足を踏出して、左にかゝり右手で頬を指差して「此の印ある時は白晝に往來するとも」と右手を前に出して右に渡し「佐々木と咎むる者もなし」と、上手斜になつて右足を踏出し、左にかゝり、上半身を前に傾けて、トン〳〵〳〵と絃に合せて首を振り「我命だにあるならば、時節を待つて再び京都の旗下に飜さんと心の笑み」と左足をふみ出し右にかゝり、右手を右にひらいてツケを打たせて大きく見得。「折節姫を迎ひの使者、云ひつけられしはハハアこれ幸ひ」と、トンと膝を打ち「百萬の大軍より」と右手を出し「討取り難き一人を討つ謀は姫にありと」と、姫を指差し「密に三浦へ內通し牒し合せし計略外れず、姫の心底極るには大願成就時來れり……ハツ〳〵〳〵嬉し〳〵悅し」と、兩手を大きく、左右から寄せて來て合掌、左を見上げ右を見上げ、その手を頂いて首を下げ「勇める面色威あつて猛く」で、左手を大きくまはして鎗をとり「實に名にし負ふ坂本の總大將と」で、左の鎗を立てゝ持ち、右手を稍下に伸して、眉を一杯に上げてツケ入りの見得となる。

三浦之助が「謀の先途を見ず相果つるも武士の意地、眞平御免下さるべし」と云ふところで下手向き三浦之助に向き合つてゐた高綱は、一寸心を動かして「オ、尤も至極」と上半身をのり出し「高綱も心底推察仕る」と、顏を正面へまはし身體を起して正面となり、右の手甲、左の手甲の紐を齒で締め「エ、惜しむらくは今少し此の謀早かりせば」と、右に軍扇をとり出し、首をひねつてから三浦之助の方に向き直り、「可惜勇士を」と、グツと軍扇で三浦之助を指差し「闇々と討死はさせまいもの、殘念さよ」と、首を垂れ「さりながら犬死とばし思はれな」と、上半身をのり出し「京都の武士に時政の」軍扇で下手を差し「眞實面體見覺えしは御邊一人」と、三浦之助を指差し「三浦が首を討取つて」軍扇で左の掌を打ち「實檢に入るならば」と、軍扇を半ば開いた軍扇を平にして目の高さに上げ、「いよ〳〵我に心を許し」と、軍扇を胸に當て「近寄る術の一つならん、時に御邊の首を以て、敵の大將討取らば」軍扇をつぼめたるを頭上から前に下し斬

る形を見せ「最後の大功忠義の第一」と、腰を浮かせて正面同ふを見込み「我は元來敵に入る」と、右手を出し眺め、左手を出して眺め「心は佐々木、面は此のまゝ藤三郎」と、右足を框の外に踏出し、左にかゝり、軍扇を開いて顏を掩つてから胸のところに下して來て、左手を左にひらいてツケ入り見得、「三浦が首は安達藤三が」と、トンと左足を踏出し、右にかゝり「討取るぞ」と、軍扇を半閉ぢて腹のところへ寄せて來て三浦之助の方へ上半身をのり出す。三浦之助は「ハ、ア忝けなし悅ばしや」と喜び「互ひに莞爾と顏見合せ」と、高綱は三浦之助の左手をとつて向ひ合ひ「笑ふぞ武士の」で氣を換へて、双方正面となり兩手をひざにおいてジッとなる。

母の件は省略されて、三浦之助、時姫は納戸へ入る。

「四方をきつと」で、陣鉦、法螺貝の音が聞えるので、高綱は下手へキッとなり、框から右足を踏出し「既に四更も過ぎたれば、東の陽氣はこれ鷄鳴」と、右手を前に伸して掌を開いたり、閉ぢたりし「南北西に人氣立つは」と、下手を見込み「ハ、怪しや」と、身體を右に傾けて、左上を見上げ、眉を一杯に上げて「東西の軍勢、坂本の城間近く寄すると覺えたり」と、右足を戻して、眞中から庭先にトン〳〵と降りる屋體が上手へ半ば引かれる。床は待合せとなり、船底に降り立つた高綱は、右手の肱を胸の邊で枉げて、左手を頭上に翳して、右ひざを上げてからツケを入れて大きく極り、トントン〳〵と上手斜にのめつて、左足でトンと踏止り、その形のまゝ身體を起して、右手を翳して、左手を前に突出して、下手奥の松の木をふり返り、向ふへまはつて下手向きとなり東に立つて兩手を左右に展げて輕く極るのが、キッカケで、メリヤス入りで、兩手を大きく前後に振つて、所謂團七走りで松の根方に進み、松をキッと見上げてから、カタ〳〵〳〵とツケを打たせて攀じ登り、下手へ伸びた枝に腰を下し、右足を踏出し、左手を上の枝にかけて、「寄せたり〳〵」と、眉を一杯に上げて見下しツケを入れて大きく見得を切る。（この邊りより再び法螺、鉦、太鼓の音を聞かす）「東は志賀越、辛崎口」と、右手を突出してひらき「伊達の一光、奥州勢、勢田ケ崎まで滿々たり」と叫び、右手で松の大幹を抱へ込んで舞臺奥を見込み「南は横川、比良の口、大將の旗眞先に、坂本指してひた寄せに」今度はその形のまゝ顏を正面へひねり「北は丹波路、亀山街道、西は京道淀八幡、皆人ならぬ處もなし」となり、「日本一度に寄するとも恐るゝ敵は只一人」と、松を飛び下りて、船底眞中に出る。三浦之助は屋體の奥から、弓（小道具圖解參照）を杖に船底へ出るので、「ヤア〳〵三浦、たとへ心は剛なるとも、深手に弱り働き得じ、後詰の副將城中より、加勢を乞はんは如何に〳〵」とトン〳〵と、高綱は立身で三浦之助を見下す。三浦之助は「コハ佐々木殿とも覺えぬ一言、必死と定まる三浦之助、箇程の手疵を何屈託」と上

手屋體前の手水鉢を倒して腰をかけ、弓を肩にかけて極る。高綱は正面となり「オヽ萬夫不當の大丈夫、早打立てん」と右足を踏出し、左手を頭上にかざして勵す。時姫は暫くのうと出て、三浦之助にとりつき別れて惜しむ、「緣の切目は蘭奢の薫」で、三浦之助はよろめきうつ伏せに倒れる。その間下手で後向けとなつてゐた高綱が左に雜兵の鎧を結び付けた鎗（小道具圖解參照）を左に持つて正面となつて、三浦之助を見下すと「無常の聲や鯨波」で、鉦と太鼓をきかし高綱は三浦之助の後へまはつて抱きかゝへるやうにしてグツと活を入れると、三浦之助は立上つてよろめいて上手の高綱に衝當らうとするので、軍扇でその胸をトンと打ち、「跡に見捨てゝ」で、立上り黑地に日の丸の軍扇（小道具圖解參照）をサツと開いて胸にかざし、左の鎗をかゝげて、首を下手へまはしツケを打たせて極り、三浦之助下手むき、蹲つて、弓を肩にさゝへて首を垂れ、時姫は上手むき、兩手を後帶へまはす形で三人畫面の見得にて幕。

（十五日目見物）

淨曲中の後白河法皇

毎年、陽春四月十三日（正しくは三月十三日）京都下寺町六條なる長講堂に、御開基　後白河法皇忌が嚴修される。本年も七百五十一年の御祥忌が修行され、併せて西山專門學校教授森美純師の法皇讃仰の講話があつた。

×

「義經千本櫻」は平家沒落の哀詩であり、「平家女護嶋」は平家榮華の繪卷である。その後者の第四に、清盛が嚴島御參詣と稱して、密かに　後白河法皇を害し奉らうとする件がある。一たん海中に沈ませられた玉體を海士千鳥が飛入つて救ひまゐらせ俊寛の下人有王が肩に負ひ奉つて危害から逃れる。清盛のこの無道ぶりに對する天罰として彼は奇病に命を終るのである。

×

「源平布引瀧」の初段には　後白河天皇が禁裡守護の木曾ノ先生義賢へ兄義朝所持の白旗を密かに賜はる。それと察した清盛が詮議の爲に御座へ近づくが、逆鱗に眼くるめいて階下へ轉げ落ちる件がある。なほ四段目は配所鳥羽の離宮の場面である。

×

「三十三間堂棟木由來」の白川の法皇は實に　後白河法皇の御事であつて、三十三間堂は即ち御惱平癒御祈願の爲の御建立である。

×

長講堂には　後白河法皇の尊像（國寶）が御影堂に安置せられてあり、勅封御自畫之宸影、宸翰六字名號等數多の御遺品が當寺什寶として秘藏されてある。京都人でもそれを知る人の尠いのと、知つても參詣する人の稀なのは遺憾である。

（森　ほのほ）